

「もの言わぬ民は滅びる」 2014年4月24日

日本基督教団東北教区は、沖縄の佐敷教会の金井創牧師を招いて、3月21日「教区センターエマオ」で「フクシマとオキナワから問われていること」という主題で「平和講演会」を開催した。同じ立場に置かれているフクシマとオキナワは関係を深めている。友人から、講演会の報告書が送られてきた。

金井牧師は「沖縄は『石』である」と話し始めている。沖縄は、第二次世界大戦の時には、本土決戦までの時間稼ぎの「捨て石」であった。戦後、アメリカは沖縄を「太平洋の要石」（キーストーン）と呼んだ。沖縄が「石」扱いをされてきた。しかし金井牧師は、沖縄をイザヤ書28章16節の「それゆえ、主なる神は言われる。『わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みの石 堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。信じる者は慌てることはない』」という御言葉の「貴い隅の石」と考えている。日本列島をワニに例えると、沖縄は「尾」の部分にあたる。ワニは「尾」に最も大きな力を持っていると聞いたことがある。沖縄は戦前、戦中、戦後とも理不尽な扱いを受けてきた。その沖縄は「貴い隅の石」として、日本の平和のために活用されるという。確かに、沖縄県民の思いが、日本全土を覆う時、平和が実現するであろう。

報告書を読んで、考えさせられた二つのことを紹介したい。金井牧師は「もの言わぬ民は滅びる」と力説している。そして、こんな体験を話している。アメリカの上陸車両が、サンゴを踏みつぶし、岩を砕きながら、海を走り回っていた。あまりに醜いので、船に近づいて英語で「ここは、あなたたちの海ではない。もっと深いところでやってくれ。サンゴを踏みつけなくてくれ」と叫んだ。すると、米兵が「スミマセン」と言って、移動して行った。「言ってみるものですね。やはり声を上げなければいけないのです。それ以来、上陸訓練はサンゴを砕かなくなりました」と話している。

3・11の被災者支援をしている「東北ヘルプ」の事務局員の川上直哉牧師は次のように話している。フランスの植民地であったタヒチ周辺に、ムルロアという島がある。その島の上空で、50回の核爆発実験をした。国際的な批判をかかわすため、その後、島の地下で150回もの実験を続行した。海の下には、数百キログラムのプルトニウムが眠っている。

1980年代まで、この事実を語ることは、ムルロアの住民には「解雇」や「死」をもたらしていた。2001年、ジャーナリストのジョン・デュマ氏がタヒチに戻って来た。タヒチ長老教会は、彼を教団総幹事として迎えた。デュマ氏は、世界のネットワークを活用して、フランスと闘い始めた。政府も味方につけ、運動は成功を納めはじめた。今、ムルロアの悲劇は、フランスの法廷で論じられ、糾弾されている。

川上牧師は、デュマ氏に成功の秘密を訊ねた。彼ははっきり「教会が支えてくれたから、ここまで来られたのだ」と答えた。彼の運動の周辺で「危険」があった。しかし、国際的なネットワークの力を借り、地元の教会の信仰によって支えられたという。

主イエスは、人間の生を絶対的に是認する福音の下で、共に生きよと教えられた。この福音を、声と行動を合わせて現していくことが主イエスへの信従である。